

3. わが国の畜産の歴史

3-1. 食肉，酪農の歴史

日本にも大昔は野生の牛がいたと推定されている。しかしわが国においてこれを家畜化した形跡は見られない。家畜化された牛馬が古来中国大陸より、朝鮮半島などを経由してもたらされたと推定されている。ただし、その頃の家畜は支配階級の所有であり、一般庶民の手の届くものではなかった。考徳天皇（在位 645～654 年）の時代に中国からの渡来人である善那（福常ともいう）が天皇に牛の乳を搾って献上し、善那（福常）の子孫は代々乳搾りの役職についたといわれている。また、家畜を飼養のためには「馬飼部（うまかいべ）」、「牛飼部」，「猪飼部（いかいべ）」，「鳥養部（とりかいべ）」といった専門集団がおり、各地に「牧（まき）」という今でいえば公設の牧場がおかれ、既にかかなりの範囲で牛馬、鶏等が飼われていた。牛馬は食用というよりは役用であったが、天皇や貴族等高貴な人達の食用とするために乳が搾られ、「蘇」（乳を濃縮した練乳のようなものであるといわれている）等に加工して納められていた。ちなみに酪農の「酪」も当時の乳製品の一つであり、また今日「醍醐味」という言葉で知られる「醍醐」とは粉乳，バター様のものであるいはヨーグルトのようなものと諸説あるが蘇をさらに精製加工したものとされている。非常な美味であったろう。この他に干し肉，肉醬等も加工され，食べられていた。

このように家畜が飼われるようになると，庶民も時にこれを食するようになったであろう。675 年「牛馬犬猿之肉（しし＝肉）を食うこと莫（なか）れ」という天武天皇の詔勅が出された。同様な殺生の禁令はこの他に何回となく出されており，このことは逆にいえば一般の人々がこれらの肉を食べていたということにもなる。当時の牛馬の主要な用途は食用ではなく軍用，交通用，運搬用，農耕用であり，これを食用に供することは，生産用具が食べられ，なくなってしまうことを意味する。また当時広まりつつあった仏教では殺生禁断の思想があり，この影響もみられる。

平安時代も末期になると中央の貴族の勢力が衰え，代わりに各地では武士が台頭してくる。貴族や寺院のものだった荘園も，次第に武士の勢力下におかれるようになる。貴族階層しか食べるのできなかった畜産物は貴族の没落ととも，日本における「食」から姿を消すことになる。これには仏教の殺生禁断の思想が，時代を経るにしたがって人々の心の中により強く浸透したこと，そして魚や豆といったタンパク質資源に恵まれた風土が背景となっている。このようにして食品としての畜産物とはほとんど無縁な時代が明治維新までつづく。

日本において畜産物が食べられ，畜産物を生産する産業たる畜産が行われるようになったのは明治になってからである。明治維新の後，西欧の文明が急速な勢いで流れ込んできた。しかし，それまでの食習慣や生活水準等もあり畜産物の消費は微々たるものであった。一般の人々にとっては高価な畜産物を食べるよりも先ずエネルギー源となり，また相対的に価格の安い米等の澱粉質食品を摂取する方が優先された。畜産物の消費が飛躍的に伸びたのは第二次世界大戦後である。これは敗戦による米軍の駐留等を契機とした急激な欧米文化の流入と，昭和 30 年代以降における高度経済成長による所得水準の大幅な上昇を背景としている。

3-2. 大規模な工業的畜産

第二次世界大戦後，特に高度経済成長を契機とする国民所得水準の上昇は，畜産物の需要の増をもたらした。そしてそれは牛肉，豚肉，鶏肉，牛乳，鶏卵といった畜産物の生産拡大を後押しすることとなった。これらのうち鶏は ① 粗飼料に依存せず，輸入穀物等を原料とする濃厚飼料のみを給与すればよい土地基盤を必要としない，② 世代交代が早いことから育種改良技術が進み，多くの

形質の揃った個体を揃えられるといったことにより、他の家畜に比べて早くから大規模な工業的畜産といった様相を呈することとなる。養豚も養鶏ほどではないが、飼料の全てが輸入に依存していること、即ち養豚とは自給しない購入飼料を豚肉に変換する業であるという点で工業的で、加工型畜産といわれる所以である。

一方、牛肉や牛乳を生産する家畜である牛は粗飼料の給与が不可欠であるがゆえに土地との結びつきが不可欠である（もっとも肉牛の肥育は粗飼料給与割合が低いために飼料の自給はほとんどなされえていないが…）。また世代交代の期間が長く家畜の改良が一举には進まず、形質の揃った家畜個体を揃えることができない。すなわち企業的な飼養には向かないということになる。このようなことから、土地に依存した農業としての色彩が強いが、このうち肥育素牛を購入し、これに飼料を給与して太らせる肉用牛肥育経営は、粗飼料を含めて必要とする飼料の多くを購入に依存しているため、養豚に類似した性質を有している。

また酪農にあっても都市近郊酪農は飼料基盤を有しているにせよ、粗飼料のかなりの部分は購入に依存している。むしろ経営内の飼料基盤はふん尿の捨て場と割り切っている農家もある。草地酪農地帯である北海道においても自前では飼料は生産せず、飼料は濃厚飼料のみならず粗飼料も全て購入し、搾りに徹するという経営もあらわれてきた。昨今の円高は粗飼料でさえも輸入した方が安いという状況をうみだしていることが背景にある。

3-3. 輸入飼料に依存する畜産

欧米の畜産は基本的には農家において生産された穀物等のうち余剰分を家畜に給与することにより行われ、飼料は自給するのが本来のありかたであった。しかし、わが国においては北海道等の一部を除いて土地資源に恵まれなかったこと、穀物（米）価格が相対的に高く、かつ米を神聖視する気風があったこと、また濃厚飼料の主原料である輸入穀物が比較的安価に入手できたこと等により、わが国の畜産は飼料の多くを外部に依存するという形態で発達してきた。特に濃厚飼料についてはそのほとんどを輸入穀物に頼っている。このことは飼料価格が安定的に安く購入できれば良いが、世界的な気候変動の影響を受けやすく、常に不安定要因を内に孕んでいることにもなる。

また、家畜ふん尿を還元し、物質の循環を図るべき農地とのつながりが断ち切られた形となることも大きな問題点である。土地に結び付いた畜産をどのようにして発展させるかは、わが国に課せられた大きな課題の一つである。